

## 接続表現における動態変化

甲田直美(東北大学)

### 1. はじめに

接続表現の変化を考えると、使用年代の異なるデータを比較する方法があるが、同一の話者、ジャンル、話題、使用場面等を均質にして比較することは困難である。近年、電子化コーパスの拡充により、接続表現と文体特徴との相関について分析が進められている。そこで明らかになったことは、文体特徴は単に話し言葉-対-書き言葉のような単純なものではなく、柏野(2013)にあるように「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」「語りかけ性度」等の要素が絡まったものであるということである。これらの研究から、たとえ書き言葉という共通した媒体であっても使用年代の推移ごとに比較しただけでは言語変化の実態を捉えることはできないものと思われる。

そこで本研究では、ある一定の共時態データにおける接続詞、接続助詞を観察することで、そこに見られる接続表現のバリエーションから変化の様態を探る可能性について論じる。具体的には、1つは『日本のふるさとことば集成』(高齢者層の自然談話)、もう1つは発表者が収集した若年層話者による自然談話である。本稿では紙幅の関係上、この2つのデータに絞って述べる。発表者がこれまで扱ったデータを含めて検討し、全体的見通しを得たい。

### 2. 接続表現のバリエーションと変化

本考察のきっかけは、甲田(2018)で検討した方言談話における接続詞のバリエーションの多少が、これまで多く指摘されている言語変化の動向と対応するということからである。甲田(2018)では、1977-1980年当時に日本の各都道府県で収録された老年層話者の会話音声を集めた『日本のふるさとことば集成』をもとに、実際のコミュニケーションにおける接続詞の使用実態を考察した。集成13地点で使用された接続詞延べ1483例から、語形・音声のバリエーションを抽出したところ、論理の接続詞には関係表示部分の語形バリエーションが多いが、列記の接続詞には少ないことを示した。順接仮定、順接確定、逆接の順に、割合として多くの異なり語数が観察された。歴史的にみて接続詞が変化を被りやすいことはこれまで多く指摘されている。Meillet(Meillet:1915-16; 1958, 46)では、接続表現は他の品詞に比べ、歴史的に変化を被りやすく、不安定で頻繁に新しいものと取り替えられると述べられている。接続詞のうち、すべての表現タイプが一律に交代するわけではない。列記の接続詞が使われる単純な結びつきは、概して、それほど明確に表現される必要がないため、表現の語形が置き換えられることなく、長い間継承されているかもしれない(ibid, 46)、と述べている。日本語では彦坂(2005)が各地の理由表現の地域差と変遷を示している。甲田(2018)では、論理の接続詞が話者の主張を導くという性質から、主張を強めたり弱めたりするため、あるいは感情の起伏に伴って、語形の長短や強弱、速度が変化するため、多くの語形を生み出すことになる」と結論づけた。これは、Meilletで言われているように論理の接続詞では、表現力のあふ文の言い回しを求めた努力が絶えず繰り返され、新たな表現になった時点では比較的新鮮さを保てるが、その新鮮さは永久に持続するものではない(ibid, 46)という見方と一致する。現場性の高い表現はその場の感情や状況に合わせた言い方が選択されるので早く変化すると考えられる。

もう1つ方言における共時態データから観察できると考えたのは、接続詞と接続助詞の変化速度の比較である。接続詞と接続助詞には関係表示部分が共通するものがある。このうちKoda(2021)で扱った関西地方の「サカイ」を含む形式について各県の会話における接続助詞、接続詞の使用は以下のものであった。

表1 関西地方の会話における接続助詞と接続詞

	接続助詞から	接続助詞さかい	接続助詞他形式	接続詞から	接続詞さかい	接続詞他形式
滋賀	2	15	30	0	0	1
京都	5	16	2	3	1	1
大阪	24	22	8	17	0	0
兵庫	33	4	6	47	0	3

奈良	3	26	9	0	0	2
和歌山	6	24	3	3	0	1

接続助詞においては「サカイ」形式が多く用いられているが、接続詞では「サカイ」形式は見られず、「カラ」を含む「ダカラ」に取って代わられている。「サカイ」に関しては接続詞の方が共通語化が早く進んでいるといえる。

### 3. 自然談話における接続表現 (2011 年における若年層話者)

発表者はこれまで接続詞に関する記述をいくつか行ってきた。接続詞は文体の硬軟からその用いられ方まで多様であり、長く使われているものから新しい口調のものまで、語形も入れ替わり、また寿命もさまざまである。

甲田(2020)で用いた自然談話データにおける接続詞(一部語形を整理して用いた)と接続助詞のデータから考える。大学生・大学院生の友人同士2~3人の対面会話8組、7時間25分(445分)を録音・録画収集した。話者19名の平均年齢は21歳(年齢幅18-32歳)である。収録は2011年6月から7月に行われた。友人同士の会話で、終始笑いを含んだリラックスした状況であった。すべての会話を文字転記した。

#### 3.1 接続詞

接続詞は全部で延べ1473例使われていた。上位12位までの使用内訳を表2、13位以降を(2)に示す。「てか」は異形として「てか65, ってか13, ていうか11, つうか1, てゆか1」を含む。会話で多用される接続詞は限定されており、上位6種の合計は1162例で、全体の79%を占める(図1)。接続詞は多種あっても頻度の高いものは限定されている。

表2 会話における各接続詞の使用数(上位12位まで計1342例)

で	329	あと	51
だから	254	それで	42
でも	229	そしたら	37
だって	139	結局	28
じゃあ	120	じゃ	25
てか	91	逆に	23

(2) 第13位以降の接続詞(括弧内は使用数, 計127例)

ただ(21), 後は(17), んで(15), たとえば(12), そんで(11), けど(8), むしろ(4), なんで(2), なのに(2), そもそも(2), だけど(2), それなら(2), それから(2), しかも(1), ところで(1), から(1), だったら(1), てことは(1)

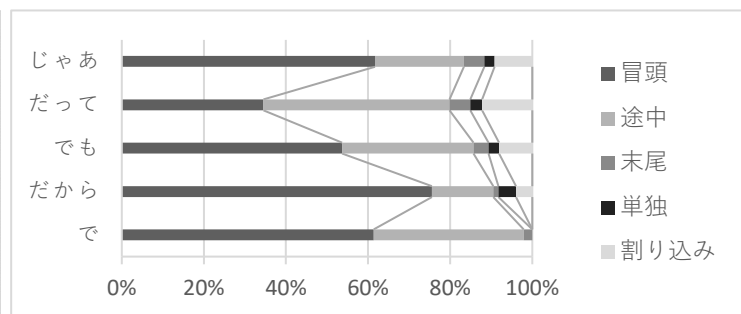
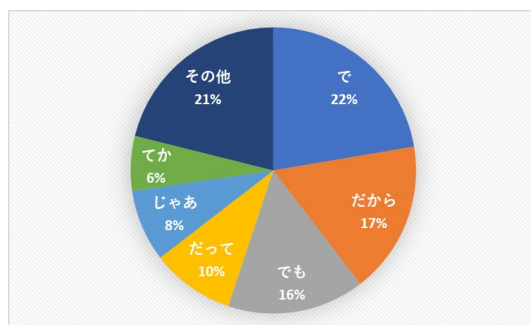


図1 会話における各接続詞の使用割合(%)

図2 ターン構成単位における接続詞の位置の割合(%)

甲田(2020)では接続詞の発話位置として、ターン冒頭・途中・末尾の整理を行った(図2)。発話内の多様な位置に現れるからである。3Cは冒頭、4Bでは末尾で用いられている。

(3) 抜粋: 冒頭(i), 途中(ii), 末尾(iii)における「でも」

1C: コンベア(.)コンベアの上に食材を載せていくっていう(ちょう)

2B: あ: : うん

→3C: でも<sub>i</sub>ここらへんさあ::でも<sub>ii</sub>あれじゃんコンビニのアレも高いしさ

→4B: コンビニ安いよで[も]<sub>iii</sub>

5C: [あ:::違う安い安い

6B: 超安いと思う

会話で多用された接続詞「で」「だから」「でも」「じゃあ」において、最も多く使用されたのはターンの冒頭で用いら

れる用法である。カジュアルな会話では、前後件ともに同じ話者が述べる、すなわちターンの中途に用いられる用法は、接続詞の中心的な用法ではないことが分かる。語例を多く収集しても一部の接続詞が集中して用いられるのは、相手発話への反応という対人コミュニケーション上の機能を果たすために、論理の表し分けというよりもわかりやすい反応として少ない語類を多様な口調で語るの方が好まれるからではないだろうか。

接続詞が会話で使われるのは前後の関係を明示するというより、他者の発言を受けての応答や末尾辞、あるいはフィラーとして用いられていることが多く、談話標識として考えた方がよいものが多い。指示語で引き継ぐより助辞のみで冒頭にくるものが多い。「んで」「なんで」「なのに」「てか」など、前件部を示す指示語を伴わずに接続詞として独立した音調で用いられている。相手の発話を指示語で客体化して指し示すのではなく、そのまま助辞で直接自らの発話につなげている。相手の発話を直接取り込んで（林 2005）、相手と共同で接続詞の前後件を作り上げるかのように提示している。

「結局」「逆に」は意味が希薄化して用いられており、接続する内容ではなく強調的に用いられる。「なので」も親疎関係によっては用いられる。「なんで（くなので）」の伸長は「だから」が担えない領域をカバーしている。

### 3.2 接続助詞

同データで接続助詞相当は 3585 例見られた。「相当」といったのは、述語に付属し、複数の述語を複合的につなげる形式を広く集めたためである。例えば、「みたいな」「っていう」は接続助詞として扱われることはあまりなく、名詞修飾の接続形式だが、言いさしの形で発話末に位置して使用されることがこれまで多く指摘されている。本研究ではこのような形式も含めて集計した。以下、単に接続助詞と呼んでおく。

次の例は、「みたいな」「っていう」による発話の終結に近い箇所に出現している例である(甲田 2013)。七夕の短冊に書かれる内容について、「みたいな」に前接して様態が、「っていう」に前接して異なる話者による意見が述べられている。

- (4) 01B: それに願い書くって  
 02A: [それにさ:()それにさ:()なんかも: (0.2)「リア充滅びろ」とかって(h)  
 03 書い[てあつたり:「みんなの願いが叶いませんように」とか=  
 04B: [hh [ま-  
 →05A: =[書いてあつたりして[うわ後ろ向きや:みたいな  
 06B: [hhh [まま確かにそれは:()目ま標はなく願い事は願い事だけどね  
 07A: う:ん後ろ向きすぎるね:hh  
 →08B: ネガティブだな:人の不幸を願うな[よってゆ:  
 09A: [そうそうそうそうそうあと()たまに:()「みんなの願いが叶いますように」みたいな感じで書いてる人もいるけど:()  
 (DS800014)

用いられている接続表現を見ると、間合いや韻律によってまとまった音調をなした発話単位の途中で用いられる場合と、各発話末で用いられる場合とがある。例えば、03の「書いてあつたり:」は発話内で用いられた例、05、08の「みたいな」「ってゆ:」は発話末で用いられている。06の「けど」も終助詞が付くものの、発話末で用いられている。接続助詞は節間を接続するというより、発話末に位置して終助詞のように使われている。発話位置に着目して調べたところ、発話内 1532 例、発話末 1993 例で合計 3585 例使われていた。各形式の割合を示す(図 3, 表 3)。

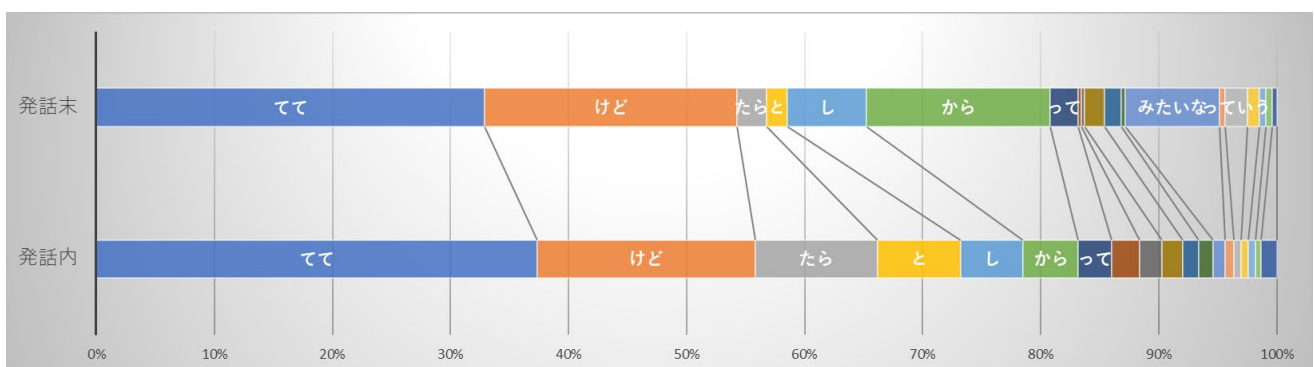


図 3 各接続助詞と発話位置の割合

表3 各接続助詞と発話位置

	発話内	発話末		発話内	発話末
てて	572	656	のに	21	29
けど	283	425	たり	18	6
たら	159	51	みたいな	16	159
と	108	35	ながら	11	10
し	81	133	っていう	10	38
から	71	310	とか	9	20
って	44	48	っていうか	9	11
ても	36	5	ので	8	10
ば	29	6	その他	20	8
んで	27	33	合計	1532	1993

その他としたのは、「ちゃ6/0, つつ4/3, なら3/2, きゃ1/0, けれど1/0, ために1/0, て1/1, とき1/1, とも1/0, ばかりに1/0, かぎり0/1 (発話内/発話末)」であった。「っていうか」(発話内)には「ていうか」1例を含む。「てて」はいわゆる「て」形の「ていて」の縮約したものだ, 「てて」の形で使われていた。「て」単独で用いられていたのは発話内位置の1例のみだった。図3からわかるように, 発話内, 発話末ともに接続助詞は上位6位までで全体の8割以上を占める。接続詞同様, 会話では多様な表現手段によって接続されるのではなく, 少ない種類が圧倒的に多く

使われる。接続助詞は発話の途中で述語を接続する用法より, 発話末で用いられることが多い。このような接続助詞の終助詞化, 名詞修飾の接続形式の終助詞化は, 発話末が相手と断絶しないように共有しようとするコミュニケーション上の動機から来る。「ていて」に由来するアスペクト形式「てて」が好まれるのは継続相が背景化に向いているからである。「みたいな」「っていう」「っていうか」等とともに, 述語の直接性を避け, 言い切らずに主張を中途にして相手へ持ちかけることが会話で好まれるためと考えられる。発話内の位置との関連では, 発話内で多く用いられる「たら」「と」「ても」「ば」は, 続ける形式であり, 発話末で多く用いられる「から」「みたいな」「っていう」は切れる形式となっている。接続詞との対応でいうと接続詞「だから」の多用に比べて接続助詞「から」の割合は少ない。しかも接続助詞「から」は用いられなくても発話末で終助詞のように機能する。

#### 4. おわりに

一定の共時態における接続詞のバリエーションから動態変化を探った。言語の中には, 言語変化しやすいものとしにくいものがある。接続詞のうち, 原因理由, 逆接, 仮定条件は変化しやすいが, 添加, 列記は変化しにくい。これは, 相手との相互作用のためにより効果的な表現を求めため変化しやすいからである。各地の方言談話で接続詞に共通語形が現れ, 接続助詞で方言形が用いられるのは接続詞が単独で談話標識として用いられるため, 入れ替えやすいからだと考えられる。この点でいうと接続詞は接続助詞より速く変化すると考えられるが, 各語が特定の文体で好んで用いられる場合もあり一概には言えない。多く用いられた用法に変化の推進力がある可能性があるが, 実際の言語使用から接続表現の語形を集めつつ, 他の資料と突き合わせて検討する必要がある。

◆本研究は, 2018~21年度科学研究費補助金の助成を得ています(基盤(C)15K02468「自然談話構造理解のための, 音声・変異動態に基づいた談話標識の研究」研究代表者 甲田直美)。

#### 引用文献

- 林誠(2005). 「文」内におけるインターアクション - 日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって 串田秀也, 定延利之, 伝康晴(編) 活動としての文と発話 ひつじ書房 pp.1-26. / 彦坂佳宣(2005). 原因・理由表現の分布と歴史 - 『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から - 日本語科学 17, pp.65-89. / 柏野 和佳子(2013). 書籍サンプルの文体を分類する 国語研プロジェクトレビュー4-1, pp.43-53. / 甲田直美(2013). 名詞修飾節による「語り」の終結 - 「みたいな」「っていう」の表現性と談話機能 - 児玉一宏・小山哲春(編) 言語の創発と身体性 ひつじ書房 pp.431-447. / 甲田直美(2018). 接続詞の語形変化と音変化 - 方言談話資料からみた接続詞のバリエーション - 小林隆(編) コミュニケーションの方言学 ひつじ書房 pp.271-291. / 甲田直美(2019). 感動詞化する接続詞 - コミュニケーションにおけるソレデ類, ダカラ類 - 小林隆(編) 生活を伝える方言会話 ひつじ書房 pp.127-142. / 甲田直美(2020). 会話における接続詞の発話位置と機能 国語学研究 pp.228-243. / Naomi Koda(2021). Two trajectories of changes on Japanese causal conjunction: Morpho-phonetic variants and discourse-pragmatic function Discourse-Pragmatic Variation and Change (DiPVaC) 5 14th-16th December 2021 The University of Melbourne, Australia & on-line / Meillet, A. (1958). *Linguistique Historique et Linguistique Générale*. Collection Linguistique 8. Paris: Champion. (松本明子(編訳)いかにして言語は変わるか - アントワーヌ・メイエ文法化論集 ひつじ書房 2007, 第1章, 第2章) / 国立国語研究所編 (2008) 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』 国書刊行会